本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第82号　2023年1月1日（毎月1日発行）

芸備線ストロール⑭ 市岡（いちおか）駅

「木製のモダンな駅舎と高速道路の上空の参道」

12月に入って、急に寒くなった。今回の取材日は12日(月)、次週にするか迷ったが、降雪を心配。予感は当たって、次の月曜日は大雪になった。営んでいる古本屋の定休日が月、火曜日。今は月曜日しかまとまった時間を確保できない。

午前7時半頃、車で庄原市街の自宅を出発。田畑の表面は厚い霜で覆われている。先月は鮮やかだった紅葉のパッチワークも、今は渋い茶色である。峠の坂道には、高床式の簡易収納庫に、凍結防止剤の袋が積み上げられている。

8時45分ぐらいに矢神駅に到着。9時5分発の新見駅行きに乗車。先月号にも書いたが、東城駅始発のこの列車は、土日は運休している。乗客は、わたしは以外は一人。5分もかからずに市岡駅に到着した。運賃は190円。

市岡駅の新設開業は昭和28年、同じ芸備線の平子駅が昭和27年開業で、地元に最寄り駅が欲しいとの熱望があったのだと推測される。駅舎は地元の木材を利用したモダンなデザイン、待合室の壁には林業促進のためのパネルが3枚、設置されている。

木製のベンチに腰かけて、持参したロールパンと缶コーヒーで少し遅い朝食。暖房は入っていないが、南側の窓ガラスや両開きのドアの全面がガラス張りで、晴天の太陽光が燦燦と入り込んでくる。寒さを感じないのは、木製の駅舎の建付けの良さもあるのだろう。快適な空間だった。

持合い室のドアの横には、「市岡ふれあいセンター」の看板、かろうじて薄れた文字を読み取れた。地域の集会場としての役割も担っているのだろう。「平成11年木材流通体制整備事業」と記してあるので、駅舎を新設したのも平成11年だったと推測される。待合室の反対側にあるトイレは、照明が自動点灯で水洗、気持ちよく利用できた。

駅舎の隣にも立派な木造建ての駐輪場があるのだが、停めてある自転車は一台だけ。新見高校のステッカーが貼られていた。広々とした駐輪場が、過疎地の現状を訴えている。

駅舎の前が国道182号線で、新見駅方面に歩いてみた。沿道の家の庭先には、縁起物の南天の赤い実が目につく。いかにも旧家という家屋の庭には、数は少ないが白い実の南天も垣間見える。ちなみに紅白は祝い事に使われる二色だが、紅白歌合戦のように対抗する二組に使われる色でも

「三光政宗」の酒蔵、出入り口の軒下に杉玉が吊るされている。

ある。起源は源氏が白旗を、平家が赤旗を用いたことだと言われている。

産地直売所の建物があって、中に入った。地元の野菜や漬物の他にも、コーヒーカップセットや茶碗などの不要な贈答品が販売されている。リサイクルショップのようで、見ていて楽しい。梅干しとキュウリの糠漬けを購入、３００円で驚くほど量が多い。

駅前に戻って、国道を矢神駅方面に向かって歩いた。しばらくすると、「市岡阿弥陀堂入口」の看板を見て、右側の脇道に入って芸備線の踏切を渡った。こぢんまりとした地蔵堂の手前の道を右折、市岡駅方面に戻ると、茅葺の屋根をトタンで覆った建物の前に出る。

「虫送り祈祷」が、毎年７月の第４日曜日に行われている。稲の害虫駆除と五穀豊穣を合わせて、疫病退散・万民快楽を祈祷する行事で、市岡阿弥陀堂の虫送り祈祷は俗称を「土用念仏の大数珠回し」といい、市岡地区に４００年以上前から伝わる。直径12～15cmの大玉を１０８個連ねて10mを超える大数珠を作り、地区住民が鐘の音に合わせてゆっくりと大数珠を絶え間なく回し、「南無阿弥陀仏」と唱え続ける。祈祷後、青竹の先を割って祈祷札を挟み、水田の川下に向けて立てる。害虫を下流へ追い払うという意味があり、「虫送り」と呼ばれる所以である。

国道に戻ってさらに進むと、「三光政宗」の蔵元がある。地元産の酒米と、近くを流れる神代（こうじろ）川の水を使った地酒で、岡山県の北西部に位置する三光山が名前の由来。三光山には「月（ツキ）・日（ヒ）・星（ホシ）」と鳴く三光鳥が住むという伝説がある。

酒蔵の出入り口の軒下に、大きな杉玉が吊るしてある。杉の葉を集めて球状にしたもので、元々はお酒の神様に感謝を捧げるものだったという。２～３月に飾られて、まだ青々とした杉玉は「新酒が出来ました」の合図の役目もある、らしい。その頃に再訪して、初しぼりの新酒を味わってみたいと願った。

国道を先に進むと、「日尾山八幡神社参道」の看板が立っている。右折すると、石造りの鳥居（写真上）の前に出る。その先の石段を登った所が芸備線の線路の上で、橋から東西に延びる線路を見渡すことができる。

その先が高い石段で、軽く50段を超えている。子供の頃に見たスポコン（スポーツ根性）ドラマで、石段をうさぎ跳びするシーンを思い出した。息を切らせて登り切り、石の鳥居をくぐると広々とした公園に出る。「憩の丘公園」で、大きな屋根のある休憩所が設えてある。桜並木もあるので、花見のシーズンは賑わうのではないか。

園内には、小ぶりな鳥居を構えた小さな社（やしろ）がある。名称は「靖國神社」、東京・九段下の靖國神社と関係があるのだろうか。国家のために殉難した霊をお祀りする護国神社であれば、全国に存在している。近くに「日露戦争凱旋記念樹松」の碑が立っている。

公園を通り過ぎた先の鳥居をくぐると、両側がフェンスで囲まれた陸橋がある。下を高速道路の中国縦貫道が走っている。この参道は、神代川と併走する国道１８２号線から始まって、芸備線の上を超え、さらには中国縦貫道の上空を歩いて渡ることになる。

その「八幡橋」を渡ると「神威耀四海」（神の威光は四海に輝く）、「皇徳普八紘」（天皇の徳は天下に広く行き渡る）の２本の石柱が両端に立っている。竹林と檜林の間の小径を下るとようやく日尾山八幡神社（写真下）の前に出る。

二対四体の狛犬が出迎えてくれた。時代が違うのか、大きさに差がある。それぞれに、味わい深い姿をしている。冬を迎えた戦地のことを想い、世界平和と疫病退散を祈願、叩頭した顔をなかなか上げることができなかった。

（次は板根駅の予定。情報提供を歓迎します。）

寄稿エッセイ

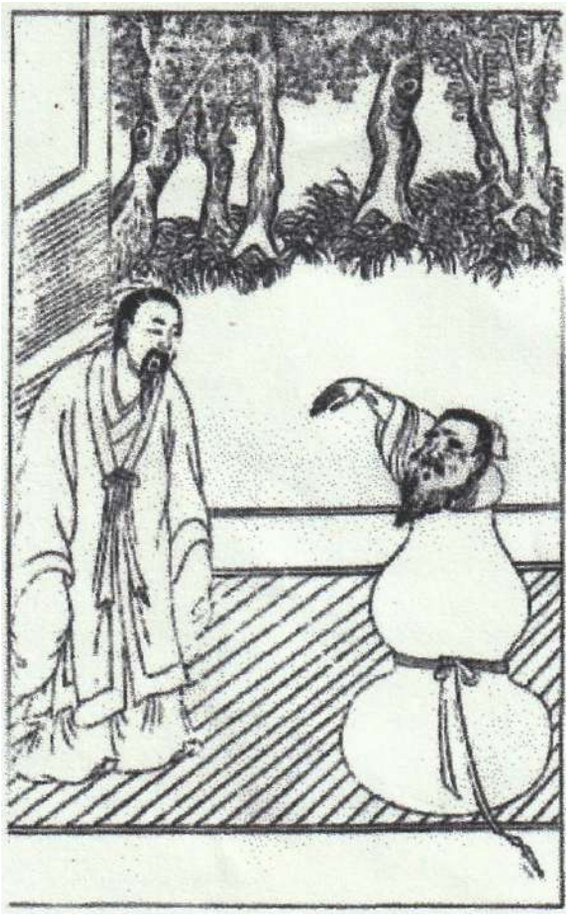
「菊と仙人」

高柴順紀（菊栽培農家）

仙人の世界は荒唐無稽。信じる気にはなれない。でも面白い。

菊とは関係ありませんが、日本では久米仙人の話が面白くて良く知られています。修行して念願の仙人になったというのに空を飛んでる最中、川で洗濯している女人の白いふくらはぎが目に入った途端彼女の前にボッチャーン。残念ながら世の男性どもも同じ間違いを犯し、墜落して一生を終える。でも悲観するにあらず。かの兼好法師もその気があったのか、『徒然草』の中で次のように告白しているのですから。

「久米の仙人の、物洗ふ女の脛（はぎ）の白きを見て、通（つう）を失いけんは、誠に手足、はだへなどのきよらに、肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし」



『列仙全伝』の挿絵

ところで中国では菊の文化に絶大な影響を与えた仙人が居ました。梁の呉均という人が著した怪異小説『續齊諧記（ぞくせいかいき）』では「九日登高」に仙人費長房が出て来るのです。

汝南桓景、随費長房、遊学累年。長房謂曰「九月九日、汝家中當有災。宜急去。令家人各緯囊、盛茱萸以繫臂、登高飲菊花酒、此禍可除。」景如言、齊家登山。夕還、見鶏犬牛羊、一時暴死。長房聞之曰「此可代也。」今世人、九日登高飲酒、婦人帯茱萸囊、蓋始於此。

この物語では費長房が九月九日には茱萸（かわはじかみ）を赤い袋に入れてひじに結び、山に登り菊花酒を飲めば災いを避けれるという重陽の風習をもたらしたことになっています。このように『續齊諧記』は重陽についての最初の文献と言われています。

しかし『列仙伝』などでは費長房は市場の管理人をしていた時に、市が始まるとヒョウタンの壺から出てきて薬を売り、終わるとまた壺の中に入る壺公（ここう）と親しくなり、壺の中に入れてもらったりお酒を飲んだりしていました。後に壺公を師として仙人の修行をしていましたが、途中でやめたため完全な仙人にはなれませんでした。壺公と別れるとき貰った札で何とか仙術を使っていましたが、その札を無くした途端、今まで押さえつけていた悪霊どもに殺されてしまいました。ここでは菊の話は全く出てきません。何といっても費長房と言えば壺公だったのでしょうか。

〈参考文献〉「中国古小説訳注―『續齊諧記』―」先坊幸子（「中國中世文學研究59号」中國中世文學会発行）

「旧暦カレンダー」（販売価格：1,650円）

・日本の自然に根差した暦（こよみ）です。
・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
・新暦（太陽暦）も併記しているので便利です。
・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和5年度版 好評販売中！

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。

文学探訪
庄原と「百三の青春」①
――いまさら何を言おうとしているのか

音谷 健郎

倉田百三は、庄原が生んだ文豪です。でも、何を書いた文豪かは知っていても、どんな文豪なのかと、問い返されたらハタと困ります。

私は、「求道精神を貫いたが、自由奔放な作家でした」と、答えます。でも、返答は矛盾してませんかと、叱責されそうです。矛盾しているのですが、実生活と重ねて眺めると、こう答えるしかありません。

大正10年30歳の百三
（角川文庫『愛と認識との出発』
の冒頭写真から）

6人の姉妹に加えて唯一人の男子として、裕福な呉服屋に産まれ、可愛がられ、甘やかされたのです。一方で、常に上を向いて伸びようとする本来の性格は、環境もあって求道に向かいました。

そして、見逃してはいけないのは、青年期を襲った3人の姉の結核死と家産の借財、自分自身の脊椎カリエス。それに耐え抜いて生きようとした、強靭な精神の持ち主だということです。

倉田百三の生家 倉田呉服店
（「庄原市の歴史通史編」より転載）

こんな百三の青春を支えたのが、初期の産業資本を育て、「庄原英学校」という開明的な文化を打ち立てた庄原という風土。百三の青年期の精神を培った旧制三次中学校（5年制）は、県下で3番目に開校した官立中学校でした。寄宿した三次の叔母の宗藤家は、驚くほどに質素ななかで、熱心な浄土真宗の信徒でした。

百三の作品を読むと、これらの風土的な背景が、色濃く反映していることに驚かされます。百三については、語り尽くされていると思われる向きが多いと思います。でも、作品に即して、逐一読み直してみるのも一興かと思います。

私の手法としては、青春三部作といわれる『愛と認識との出発』『出家とその弟子』『青春の息の痕』の庄原ゆかりを吟味します。その上で、兄百三と長く行動を共にした4歳年下の倉田艶子の著作『兄百三』を参考にします。『兄百三』は、兄への身内贔屓は否めませんが、その率直さ故に透けて見えてくるものも少なくありません。

ちなみに、『愛と認識との出発』のいくつかのエッセイは、結核の療養で庄原・上野池の湖畔の庵に滞在し

た夏に書かれたものです。瓢山（ひさごやま）にある文学碑「森の沼」の碑文は、この『愛と認識との出発』のうちの冒頭「憧憬――三之助の手紙」の一節です。碑文「奇しき寂寥の情調に／もの皆は首を垂れて白く愁う」は、いまも変わらぬ上野池の情緒を伝えているといえますが同時に、今は山裾を走る車の喧騒に、孤立しているともいえます。この三之助とは、三次中学時代の親友で歌人中村憲吉の弟です。

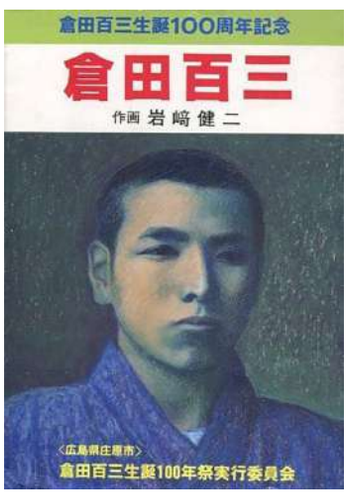
『青春の息の痕』は、一高時代の親友久保正夫、久保謙宛ての書簡として、百三の恋、愛や煩悶を赤裸々に伝えるなどの体裁をとっています。その「久保正夫」は、百三の庄原滞在時に訪ねてきて20日間も滞在しています。書簡で「あなたが廿日ほどいらした奥座敷で、姉は寝床のなかでどんなことを考えていたでしょう」

などと、家族の悩みなどもぶちまけています。庄原が、色濃く映し出されています。

『出家とその弟子』を自費出版した岩波書店版には「宗藤静子に捧げる」との献辞があったとのことです。三次の下宿先の叔母夫婦の信仰の深さが、全編の背景にあります。

これらの他に、百三生誕１００周年記念のコミック、岩崎健二作画『倉田百三』は、百三の三次中学時代に流行った男同士の同性愛をも丁寧に追っています。タブーとして避けられがちな百三の少年らしい一面などが描き出されていて、大いに参考になります。

亡くなった土居緑、西田寿吉両人の百三発掘の貢献は見逃せません。というのは、両人の文献集めが始まるまでは、百三の著作を系統的に集めた場所は何処にもなかったのです。



断片的なエピソードが伝わっているだけだったのです。そんな時、田園文化センターができ、両人が「倉田百三文学館」の開設に力を尽くしました。

百三の晩年は、日本主義に傾き、戦時体制に加担したため、戦後しばらくはあえて百三の顕彰の労をとる人もなかったのでしょう。土居、西田両人が、生い立ちの記『光り合ういのち』の刊行で、庄原が育んだ百三の少年、青年期を蘇らせた意義は大きいと思います。

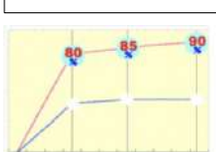
ここまで書いてみると、このシリーズは、百三作品の吟味と言うより、百三作品詮索の“冒険”に出掛けるような気分です。

次回は、「魚が水を得た如く」を掲載します。

「ぐんぐん伸びよう会」　（教室：庄原市川西町 241　連絡先：080-3631-9125　やないたえこ）

人間の脳は、良い働きかけをされたら 3 歳までに 80%、10 歳までに 90% 成長するそうです。 3 歳までの乳幼児に対して、まだ何もわかっていないと思われがちですが、いろんな言葉がけをたっぷりとかけてあげると、驚くほど吸収し、成長できるのですね。

年齢による脳の発達
―：良質の刺激を受けた子の発達
―：刺激のない子の発達



０１２３４５６７８９１０（歳）

絵本の読み聞かせや童謡は、お父さんやお母さんの優しい感情のこもった声で読んだり、歌ったりしてあげましょう。

心が落ち着いて、人間的にも豊かな子どもに成長してくれるでしょう。

体験学習受付中！！　お気軽に問い合わせくださいね。　　対象者：0歳～小学 6 年生

虫と草木と人びとと⑦⓪　中村慎吾

「植物画とは何か ―日本の植物図譜を中心に」(13)

著者紹介：一九三一年、比婆郡(現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ウチワゴケ、ツルホラゴケ、イワヤシダ、カラクサシダが掲載されている「新撰日本植物圖説」は、イワヤシダなどに見られるような精密で完璧な図に加え、学名・異名、詳細な記載がつけられていて学術書としてはきわめて優れた名著であったが、当時の文化水準では一般には受けいれることはなく売行は低迷し、家計の足しにはならなかった。

牧野富太郎が「新撰日本植物圖説」の序文後段で、「彼大學企圖ノ大業ニ従フヲ以テ我畢生ノ任ト爲シ其任ヲ遂グルヲ以テ我無上ノ娯楽ト爲ス」とある大学で編纂し、牧野富太郎が心血を 注いでその任に当たった「大日本植物志」は、いろいろな困難とたたかいながらも、着々と仕事を進め、1900(明治33)年２月、「大目本植物志」第１巻第１集が刊行された。

ヤマザクラを第１図版としたのは、ヤマザクラが日本の野生櫻を代表する種であるからであろうか(図1)。

中央に描かれた全形図は、花の重なり、葉の鋸歯や托葉など余すところなく描かれていて、花弁や新葉の柔らかさを巧妙に表現している。そして、全形図を中心に花弁の断面図、花弁の部分図、雄しべ、雌しべ、莉、柱頭の部分図など、バランスよく配置されている。

「新撰日本植物圖説」の序文前段に「同學新ニ大日本植物志編纂ノ大業ヲ起シ海内幾千ノ草木曲蓋シ詳説ヲ經トシ精圖ヲ緯トシ以テ遂ニ其大成ヲ期シ此學必須ノ偉寶ト爲サン」と記していることから考えて牧野は相当な意気込みで、ヤマザクラの図を仕上げたと想像される。牧野にとって記念すべき作品であり、代表作のひとつであろう。余談であるが「大日本植物志」第１巻第１集第２図版はヤマザクラが実をつけたものを全形図とし、果実などの部分図を第１図版同様、配置されている。なお、原図は銅版画に製作され、印刷された。

第80回特別展ではオオヤマザクラの原図(牧野植物園所蔵)が展示された。原図を見ると、花をつけた枝の全形図、花を多くつけた枝の全形図、葉と実をつけた小枝の図、花の断面図、雄しべの部分図などをすべてケント紙へ筆で描き、それらを切り取って構図を考えながら配置していったと考えられる。

まず、大きく葉を伸した小枝の図を左下へ置き、その右へ花をつけた小枝の図を置き、その後、花をつけた枝の全計図を右寄りの中央へ配置し、花を多くつけた枝を配置し、最後に花の断面図がおしべの部分図を余白に配置したのではなかろうかと考えられる(図2)。

この構図になるまで、恐らくかなりの試行錯誤があったのではなかろうかと考えられる。描こうとするオオヤマザクラが、種の典型もしくは標準的な個体であるかどうかを徹底的に吟味した上で選び、それを精密に描き、オオヤマザクラの花はヤマザクラの花より赤味が強いので、そのことが伝わるよう、花弁へ薄墨で濃淡をつけ、葉にも同様に濃淡をつけて花の光沢が伝わるよう描かれている。ヤマザクラの図といい、オオヤマザクラといい、牧野が描いた植物図はこれまでにない傑作であると共に今後、このような作品は生れないであろう。

図1 ヤマザクラ
（大日本植物志第１巻第１集第１図版による）

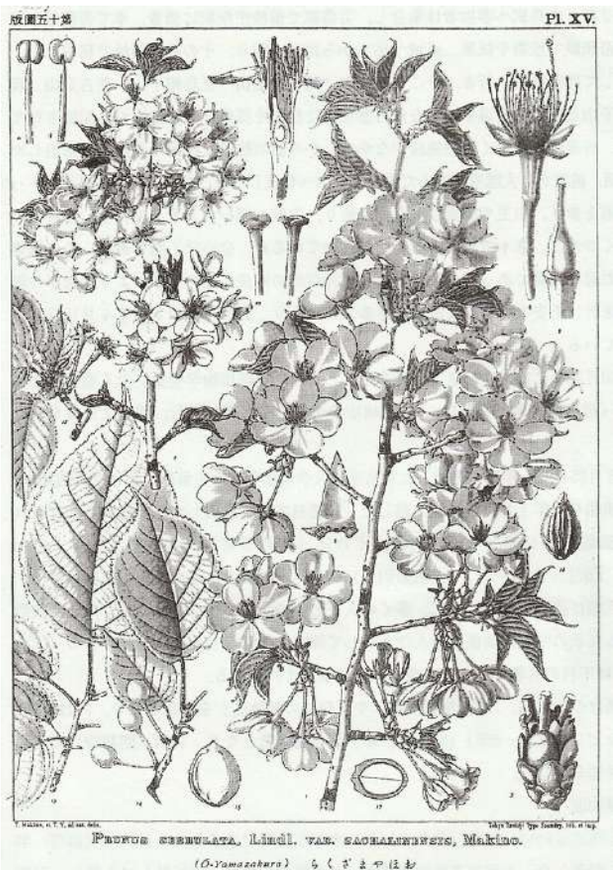


図2 オオヤマザクラ
（大日本植物志第１巻第４集 15 図版による）

「つれづれ歌談」㉛

松岡 初枝

新年、古代人にとって雪はめでたい証、積る雪は豊年万作を意味します。

・田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

山部赤人

田子の浦から出て見ると、富士山の高嶺に雪が積もっていることよ…。言わずと知れた有名歌で、百人一首にも選出されています。

・新しき年の初めに豊の稔（とし）しるすとならし雪の降れるは

橘諸兄（たちばなのもろえ）

新しい年のはじめに大雪が降りました。今年は豊年万作間違いなし。めでたいことです。応詔（おうしょう）歌であるこの歌は、天平十八年（七四六年）正月、元正上女帝の命により、詔に応じて献上した歌です。諸兄は従一位左大臣、まさに彼の絶頂期であり、政治の中心にありました。新年の大舞台で得意気な彼。しかしこの十数年後、悲劇が待っていようとは思いもよらないことでした。

・初春の初子（ね）の今日の玉箒（ほうき）手に取るからに揺らぐ玉の緒

大伴家持

新春の初子の日、玉箒を手に取るだけで心が揺らいでしまうのだよ。この歌は意味深く、この頃強大な力をつけた藤原氏により、橘氏や大伴氏の力が弱体化してゆきます。歌が詠まれた前年（七五七年）に橘奈良麻呂の乱があり、七五八年は暗い年明けとなりました。時の皇后光明子が養蚕をする新年の行事に使う玉箒に掛け、世の揺らぎを詠んだ歌なのです。この聖武、藤原勢の力の陰で、旧勢はひっそりと歴史から消えてゆくのです。光と陰は歴史の常であり、どんな人もこの流れの中のひとこまにすぎません。

新年がどんな年になるか、誰も知りません。

白鷺（しろさぎ）

――現代御伽草子㊻

亜木冬彦（あきふゆひこ）

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

今日は誰も来ないだろうと、ゆったりとした気分で本を読んでいた。何年かぶりの大雪で、店頭の雪かきをしてもすぐに降り積もってしまうので、もう諦めていた。だから、ドアの自動扉が開いたときはドキリとした。

黒い革ジャンの上に雪を纏った男が姿を現した。かなりの長身だ。

「申し訳ありませんが、体の雪を落としてきてもらえませんか」

このまま店内を歩かれては、雪が飛び散って本が濡れてしまう。男は素直に従った。ドアの向こうで、雪を払う音が聞こえてきた。

再び姿を現した男は、石油ストーブを見つけると、駆け寄って素手の手をかざした。見るとスニーカーを履いている。

「広島でもこんなに雪が降るんだね」

「県内では、広島の北海道と呼ばれてますからね。近くにスキー場もあるんですよ」

そう言ってタオルを渡すと、濡れた頭髪をゴシゴシと拭った。短髪のグレイヘアーで、五十年輩だろうか。鋭い眼をしている。

「どこから来たんですか？」

初めて見る顔だった。

「横浜から」

「どうやって来たんですか？」

鉄道は不通のはずだった。高速道路も、トラックの事故で通行止めの区間があると、今朝のラジオのニュースで言っていた。

「広島からレンタカーだよ。もう10年以上も運転していないから怖かったけどね」

（わざわざうちに来るために？）

声には出せなかった。

「この本、おたくで買ったんだけど」

革ジャンのジッパーを開けて、ウエストバックから本を取り出した。

「ああ、伊丹準吾さんですね」

最近、ネットで販売したばかりなので、よく覚えていた。本のタイトルは「誇りうるふるさとを」、サブタイトルに「灰塚ダム闘争30年の歴史」とある。

灰塚ダムは、三次市の江の川水系上下川に建設された多目的ダムだ。予備調査が開始されたのが１９６５年なのだが、たちまち地元住人の猛烈な反対運動が繰り広げられ、ダムが完成したのはそれから41年後のことだった。この本は、その闘争の歴史の記録である。

「おれの知り合いが、この灰塚ダムのことを話していたんだ。自分の故郷は、ダムの水の底に沈んでしまったんだってね。お父さんが反対運動をしていたようで、調査に来た役人を、薪を振り回して追い払ったこともあると言ってたな」

この本を注文した理由がわかった。一般の人が興味を持つ本ではなかった。

「このスタンプ、蔵書印？　これを見たときに、ひょっとして彼女のお父さんじゃないかと思ったんだ。そう考えたら、もうじっとしていられなくてね。気が付いたら、新幹線に乗ってたよ」

裏表紙の見返しに、蔵書印が押されている。住所と名前を記した簡素なものだが、その住所が「双三郡三良坂町棗原」となっている。今の三良坂町は町村合併によって三次市になっている。そして、棗原（なつめばら）は、灰塚ダムによって水没して消滅した地区の名前だった。その蔵書印をずっと使い続けた人物の故郷への愛惜が、刻印されているような気がした。

「滝山サキという名前なんだがな。この滝山耕作さんが父親だと思うんだ」

鋭い眼光で睨まれた。

「この本を持って来たのは、この耕作さんかい？」

個人情報に係わることなので、しばし考えた。

「サキさんという人の年齢は？」

記憶をたどるように遠い視線をした。

「おれが知っているサキさんは、10年ほど前に37歳だったから、今なら47歳ぐらいだろうか」

本を持って来た女性の容貌が、47歳という年齢としっくり重なった。

「たぶん、サキさんだと思います。亡くなった父親の蔵書だと言ってましたからね。ただし、具体的なことは何も聞いていません。買取だったら、住所氏名を書いてもらって、身分証明書のコピーを取らせてもらうのですが、お金はいらないと固辞されたので、本を受け取っただけなんです」

しばらく間が空いた。

「彼女……、元気そうでした？」

「そうですね」

控えめな物腰だが、意志の強そうな眼差しが印象的だった。

彼が小さく頷いて、着ている革ジャンを脱いだ。右腕のセーターの裾をたくし上げると、手首の上部から鮮やかな刺青が現れた。

「恥を晒すようだが、おれ、覚せい剤で逮捕されたことがあるんだよ。幻覚症状が出て、医療刑務所に入れられてね。そこで看護師として働いていたのがサキさんなんだ。サキさんのおかげで、おれは退院して、刑期も無事に務め上げた。シャバに出てすぐに会いに行ったんだが、そのときはもう辞めていた。患者の扱いでよく院長とやり合ってたからな。頭がモヤモヤして、ヤバくなったときはいつもサキさんの顔を思い出すんだ。血だらけになって、暴れるおれを抱きしめてくれたんだ」

ニヤリと笑った。

「どうしておれのようなクズの面倒を親身に看てくれるんだと訊いたことがある。彼女、娘さんを亡くしているんだ。自分が殺したようなもんだと言っていた。患者の世話をしていると、気持ちがやすらぐんだそうだ。自分のためにやっているんだから好きにさせてよって言われちゃったよ。白衣の天使って、本当にいるんだな」

白鷺の姿を思い浮かべていた。

ある伝説が残っている。灰塚にはかつて、白鷺寺（はくろじ）という寺があった。鳳源寺四世愚極が止宿したときに、前山に白鷺が飛来したのが由来だと言われている。江戸時代の享保年間、洪水や干ばつ、疫病などが続き、各地で一揆が起こった。その寺の修行僧戒満と、親孝行で優しい村娘のたきが恋に落ちるが、大干ばつで食べるものも無く、たきはやせ衰えて亡くなってしまう。

悲しみにくれる戒満は、飲まず食わずで百日間　寺の裏の斜面に穴を掘り続け、その中に観音様を据える。その穴観音が完成した時、戒満の命も尽きる。憐れんだ村人は、二基の五輪塔を建てて二人の霊を弔い、命日には必ず穴観音に花や線香を供えた。それ以来、この里には干ばつもなく、みんな幸せに暮らしたという。

「もし、サキさんがまた来ることがあれば、伝えてほしいことがあるんだ」

その可能性は少ないと思ったが、黙って頷いた。

「おれ、親父になったんだ。半年前に、娘が生まれた。こんなおれでも、父親になれたんだ。サキさんのおかげだよ。おれ、頑張るから！」

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。
・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

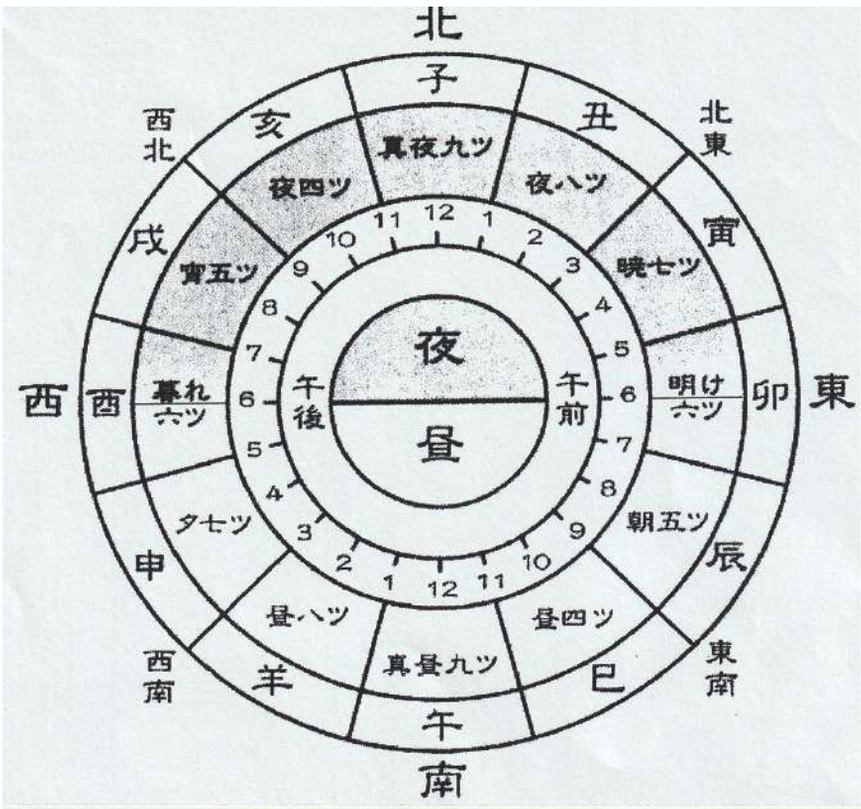
特別連載⑯

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

六時刻

現在のような時刻制度を用いるようになったのは、一八七二（明治五）年十一月九日、詔書と同時に出された太政官布告によってだった。これによると『改暦と同時に従来の時刻法を改正し、午前を十二時間、午後も十二時間の昼夜二十四時間とする』



江戸時代の時の呼び方一覧表

というものであった。当時としては、いきなりかつ大胆なもの、つまり「もう一ヶ月もないけれど十二月二日を新暦の明治六年一月一日にします、『太陽暦』に基づいて一年を三百六十五日、一日を二十四時間、何時何分と言う時刻表示にします。」と、いうものである。

江戸時代の時の呼び方は、日のあるうちが昼で、暮れれば夜。昼夜それぞれ六等分して一刻（いっとき、二時間）として時間を計った。そして、時刻や方位の呼び方は数字でなく十二支が当てはめられた。子の方角を北にして、右回りに十二支が当てはめてある。上掲の表を参照してください。

さらに、一刻を四等分して細かく表した。午（うま）の刻（こく）を例にとり、一刻の真ん中は「正刻」と言う。「正午」は「午」の一刻＝十一時～十三時の真ん中だから十二時にあたる。「正午」というのはこの名のこりである。また、「草木もねむる丑（うし）三ツ時」は、「丑の一刻」は夜中の一時～三時、これを四等分した三番目のところだから、二時～二時半までの約三十分間ということである。

この時代、千支（えと）の他に数字も使われた。耳で聞いて時刻を数える。寺の鐘が時刻によって鳴ったことは知られている。日出前に星が見えなくなる午前六時を「明六ツ」と、日が暮れて星が見える午後六時を「暮れ六ツ」とに鳴らされていた。そして、昼夜とも順に五ツ、四ツ、九ツ、八ツ、七ツと数えた。この並びは易の考え方に由来している。

参考までに、土曜日のことを「半ドン」というのは、オランダ語のドンタク（日曜日）からきており、半日休みなので「半ドン」。

夜半は子の刻で、夜中、現在の午後十二時ごろ。鶏鳴（けいめい）は丑の刻で、明け方、一番鶏の鳴くころ。日出は卯の刻で、太陽がのぼるころ。日の入りは酉の刻で、太陽が沈むころ。黄昏（たそがれ）は戌の刻で、夕暮れ、暮れ方。

江戸の生活の中から、大名行列「お江戸日本橋七つ立ち」は寅の刻。芝居の開始は卯の刻。おやつの時間は未の刻。商店閉店、吉原夜見世開始は酉の刻である。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」の会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」普及に尽力している。）

シニア海外ボランティア・エピソード①

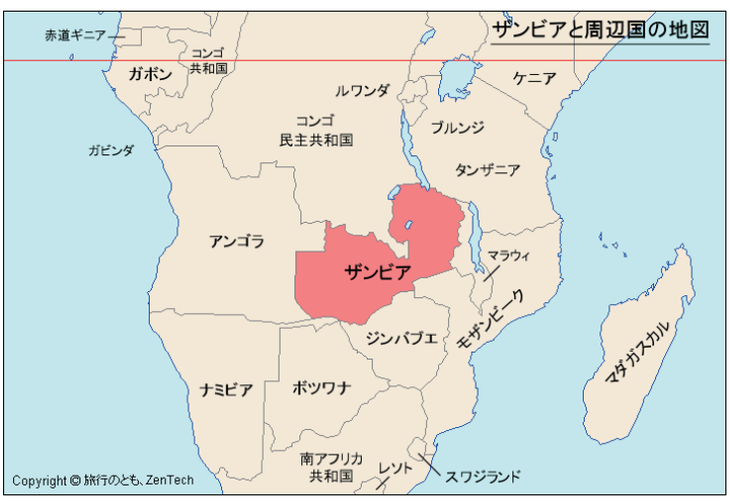
「運命の出会いだった JICAの募集広告」

山崎 允（まこと）

その年の9月末に「定年退職」を控えた2002年3月のことだった。バスのつり広告に「何かがひらめいた」。見出しは、「あなたの知識・経験を未開発国で生かしてみませんか？」とあった。外国人の観光旅行客を扱うインバウンド、日本人観光客の外国、特に、秘境地を得意としたアウトバウンドを案内した業務経験を生かして、観光専門学校で教鞭をとっていた。

バスを途中下車して、JICA関西（当時はJICA兵庫）に向かって走っていた。ロビーにあった「シニア海外ボランティアの募集」の冊子を手に入れ、急いで帰った。応募締切が一週間後に迫っていたのであせった。「定年退職の翌月、10月末に出発出来るなんて……」、もはや受験に合格したかのように、いや「合格するんだ！」と自分に言い聞かせた。

広島で一人暮らしをしていた母は一年前に他界していたので、ある意味、自分も家族も自由の身になったので（おふくろゴメン！）、最初の関所である妻に伺いを立てると「いいんじゃない」と快い返事。外務省の外郭団体であるJICA（ジャイカ、日本国際協力機構）が開発途上国の産業を促進させるため、日本で活躍した専門家で、語学の才能のあるシニア（満49歳から69歳まで）が受験できる。今から思えば、この時乗り合わせたバスが幸運をもたらしてくれたのだ。



応募書類の「志望動機欄」には、1964年の東京オリンピックや1970年の大阪万博で世界各国からの観光客に応対したこと。日本人観光客を世界の秘境地、アマゾン、アラスカ、南米へと案内し、低開発国の状況を把握していること。兵庫県肢体障害者協会の人たちを毎年一回8年間にわたり一泊二日の旅行に案内、車イスから障碍者を抱え上げ、バスの3段のステップを上がり降りしたこと等々を、熱意を込めて書き込んだ。

若かったころラブレターの返事を待っていたように、毎日郵便を待った。そして、運よく書類選考にパスした旨の報せが届いた。「バンザ～イ」、この瞬間からアフリカ大陸のザンビア共和国での国際ボランティア活動が始動したのだ。その時撮った家族写真が、今でも玄関に飾ってある。

面接や健康診断の日程が届いた。観光専門学校で学生達を指導していた通りに、私自身が面接官に対応した。そしてみごとに合格！　その後、JICAで合格したシニアボランティアが集まり、出発前の情報入手に時間を割いた。同国がエイズの罹患率が世界一であるとのことを知ったときは、少なからずショックを受けた。

しかし、インターネットで検索してもザンビア共和国の情報は少なく、書店でも関連するものは皆無に等しかった。「だから我々を必要としているんだ」と心を奮い立たせ、開発途上国であっても決して「してやるんだ」という高圧な姿勢ではなく、「させていただくんだ」という心構えが必要なのだと自分を戒めた。

持病の高血圧の薬が現地でも手に入るということを確認してもらいホッとした。出国に備えて予防接種をした。B型肝炎、C型肝炎、破傷風、狂犬病予防接種……、よく体が持ちこたえるなと感心するほどだった。退職と出発前の歓送会などをしてもらい、まるでスターになったように忙しい日々を過ごした。

9月に定年退職し、翌10月に赴任地へ出発することができたのは、長年肢体障碍者の方たちを宮島、出雲大社、瀬戸大橋等にボランティアとしてご案内したことへのご褒美なのかもしれない。

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

借金で払ふ借金大晦日　近藤 昌平

枯菊を燃して弾ける火の粉かな　冨久 光

初日の出太古の色に染まりけり　片岡 正人

雪折れのくろがねもちの実は赤し　隆愚

夫の忌を修し入院石蕗の花　大槇 三代子

幼子の歩くみちすじ石蕗の花　寺内 龍二

破れ門紅白の南天実りけり　赤川 冬人

ひととせはあまりに早く過ぎゆきて
星となりし人想う年の瀬　松岡 初枝

投稿＆寄稿

候のことば
「雪下出麦」

隆愚

日本の暦に七十二候というのがあります。冬至の末候で、一月一日から一月四日までを「雪下出麦」、読み方は「せっかむぎをいだす」とか「ゆきわたりてむぎのびる」と読みます。畑は一面雪でおおわれていても、その下で、麦が芽を伸ばしている頃です。

麦を蒔く時期は、十月から十一月ごろで、すぐに芽をだすといいます。その後、雪や寒さを乗り越え、年を越して実りの時を迎えるのですね。「越年草（としこしぐさ）」という異名を持っています。

新暦では、ちょうど新年に重なる時期。雪の下で伸び続ける麦は、育み続ける希望の象徴なのかもしれません。

「夢の中」

赤川仁洋

年齢を重ねるにつれて、夢を見ることが多くなった。ほぼ、毎晩見ているような気がする。これは、歳を取って早く寝るようになったことに起因していると、自分なりに分析している。

医学的には、睡眠にはレム睡眠とノンレム睡眠とがある。レム睡眠とは、身体は弛緩して休息状態にあるが、脳は活動して覚醒状態にあることをいうらしい。心身共に休息状態にあるのがノンレム睡眠。

若い頃は宵っ張りで、ひどいときは夜が明けてから寝ていた時期もある。睡眠時間が足りないせいで、夢を見る余裕もなく熟睡（ノンレム睡眠）している。それが、老化によって早く就寝、その分、早起きもするようになったのだが、若い頃よりも睡眠時間は多くなっているので、明け方のレム睡眠時間が長く、夢を見るようになった。

それでは、どんな夢を見ているのかというと、若い頃の失敗の場面がほとんど、いわゆる悪夢である。この前は、大学受験の前に迷子になって、見知らぬ街中を彷徨った。仕事でのミスの場面も多い。朝のスタートが悪夢なのだから、気分は最悪だと思われるかもしれないが、案外スッキリしている。ああ、夢で良かったと、ちょっと得した気分になれるので、差し引きはゼロ？

初夢も良い夢は見られそうにもないが、終焉を意識する年齢になり、現実の夢（目標）は前向きでありたいと念じている。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

きもので九日市へ

きものを着て、九日市を散策してみませんか。
レンタルのきものを着付けします。

日時：1月9日(月) 9:00～13:00
場所：楽笑座　料金：1回500円
予約：赤堀
(☎080-5627-2148 当日申込OK)

水彩画・羊毛フェルトで描く庄原市
―上田智暢と倉岡聖子…異色の融合作品展―

水彩画家として多彩な活動をする上田智暢氏と羊毛フェルト作家のくららおばさんがコラボして描くふるさとの情景。

日時：1月8日(日)～10日(火)
　　10：00～15：00
会場：市民ギャラリーアート多愛夢
　　(庄原市西本町2丁-21)
入場は無料です！

九日市新年大福引大会！

九日市で買い物をした方に抽選券を進呈。特賞は「5,000円の記念硬貨」で、当たりくじが4本入っています。
九日市の出店者＆賛同者がたくさんの賞品を提供、残念賞はマスクで空くじはありません。新年の運試しにどうぞ！

日時：1月9日(月) 10:00～13:00

編集後記

◇新年号をお届けします。市岡駅は初めての場所でしたが、神代川と国道、芸備線、高速道路が併走する場所で、散策していて面白い場所がたくさんありました。書き足りなかった部分はまた別欄で書かせていただきます。
◇音谷健郎さんの新連載、山崎允さんの“新装開店”、楽しみですね。
◇報告が遅くなりましたが、「グランデ広島39（季刊冬）」に、「芸備線ぶらぶら散歩」の2回目が掲載されています。比婆山駅から道後山駅までを書いています。
◇みなさまにとり平穏で充実した年でありますことをお祈りいたします。本年もよろしくお願いします。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第256回

しょうばら九日市（くんちいち）

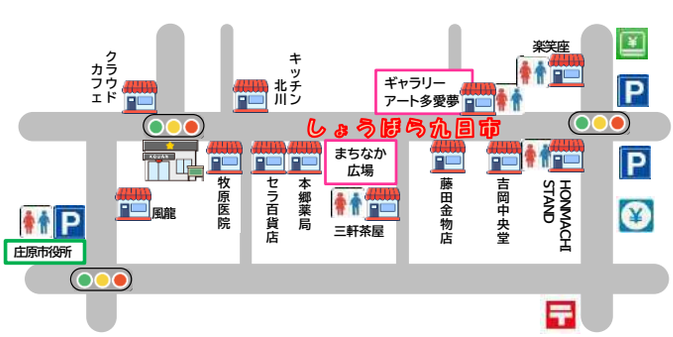
〈出店一覧〉

＊文屋
＊お福
＊郷屋
＊工房アム
＊ぬくもり
＊ちくちくはうす玉手箱
＊かぐや姫
＊和み屋
＊農楽会
＊さだっさ
＊アーミッシュ
＊ふくふく牧場
＊満じいの手打ち蕎麦
＊克國水産
＊久代水産
＊くんえん工房　香豚
＊どんぐりーず
＊佐藤園芸
＊田崎屋
＊宮川屋
＊「福引き」を、まちなか広場前にて開催します！

2023年
1月9日(月)
9:00～13:00

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
　1月8日(日)～1月10日(火)10時～15時
　水彩画と羊毛フェルト人形
　上田智暢・倉岡聖子　二人展
★楽笑座「アカボリ」 着物着付け(女性)500円
　「うた声喫茶」 開催　13:30～15:00
★どら書房→休憩所あります！！
★風龍→九日市スペシャルで餃子200円！
★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
　九日市特製ピタサンド600円



＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，０００円～
九日市愛好会事務局　TEL/FAX(０８２４)７２－８２８５
〒７２７-００１３　庄原市西本町２-１-１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp